テロリズムの相対的解釈と分析

平成 25 年度入学
九州大学　文学部　人文学科
社会学・地域福祉社会学研究室

要約

「テロリズム」という言葉は特殊であり、単なるラベリングであるにも関わらず、その意味は時代とともに変化してきており、扱いには注意が必要である。その定義も国や組織によって様々であるが、「政治的、宗教的、イデオロギー的行為」「恐怖のおしつけ」「暴力」などの特徴が一貫している。しかし、「テロリズム」と聞いて連想するものは近年変化を見せており、無差別攻撃や自爆、宗教色の濃さなどが多い。このような現代的テロリズムを「新テロリズム」や「現代テロリズム」などと呼ぶ人もおり、どのように「新テロリズム」に移行していったのか、今までとはどのような点で異なっているのかを見ていく必要がある。そこで、これまで活動が顕著であった代表的なテロリスト集団をいくつか挙げ、それらの比較を行うことで現代テロリズムを浮き彫りにしていく。

代表的なテロリスト集団の簡易資料の比較からは、私たちの想像以上に、テロが頻繁に起こっていること、予想と反して欧米などを敵対視したものよりも中東などの現地で起こるものの方が圧倒的に多いこと、などが分かった。その中で、テロリストの集団がイデオロギー的行為を目的としているものと宗教的行為を目的としているものの二つに分類できることがわかり、このような観点から分析を行うことにした。失業や貧困などの負の要因の部分においては両者にさほど差は見られなかったが、宗教的行為を目的としたテロリズム、いわゆる現代テロリズムの方は、利益などを求めて他の大国が関与してくる分、問題は複雑化している。さらに特徴の変化を見た時に、標的の変化と動機の変化という大きな二つの変化を大まかに挙げることができた。標的の変化としては、これまでは皇帝や国王、政府の役人などの要人を狙うケースが多かった。しかし、イデオロギー色から宗教色へと、すなわち現代テロリズムへと変化を遂げるにつれて、目標を特定しない無差別テロリズムが増加している。また 1983 年のベイルートの米国大使館自爆攻撃事件により 63 人が死亡して以降、 自爆行為によって多くの人々を殺傷するケースも増えている。動機の変化としては、かつては革命家や無政府主義者が政府の転覆等を目指していたが、 現在のイスラム教過激派テロリストたちの行動原理は、イスラム教のジハード（聖戦） の思想であり、目的は主としてイスラムの信仰を守ることであると見られる。また、裕福であったり学歴があったりするものがテロリズムに奔るという、私たちが理解しがたいようなことも多く起こるようになっている。

しかし、理解し難いとして遠ざける一方では決して考察も深まらず、今までと同じである。やはり、私たちが普段知ろうとしない事実に目を向け、ある一定の範囲内においてテロリズムを受けいれることをしなければならない。そこで、相対的視点をもって現代テロリズムについて調べ、分析を行っていく。まずは、人口や経済の面から見ていく。現在中東やアフリカでは人口爆発が起きており、若い年齢層が激増し、雇用の機会が極端に限られている。その結果として、私たちが想像もつかないようなハングリーな精神が小さい頃から身についたり、働き口としてテロや戦争へと向かうケースとなっている。仮に移民に成功できたとしても、移民先の土地で差別にあったり、移民先の経済が悪化した際の第一のリストラの対象になったりするなど、報われないことも多く、その地でテロリストに逆戻りしたりもする。次に宗教対立の問題がある。イスラム教にはスンナ派とシーア派という二つの大きな宗派が存在し、政治や経済、暮らしや土地の問題にまで関わってくるため、ただの宗教対立とは違って複雑である。この宗教対立に着目すると、現在中東や北アフリカで起きているテロリズムのほとんどと関係しており、宗教対立がテロリズムをなくすために必ず解決しなければならない問題の一つであることが分かる。最後の相対的分析は私たちが知らないテロリストたちの被害である。テロリストに対する軍の作戦や空爆によって奪われる罪なき命は計り知れないが、正義の下における行動の結果であるのであまり言及されない。しかし、今いるテロリストを皆殺しにしたとしても、次のテロリストの台頭を止めることはできない。そのような事実に今一度目を向ける必要があるのである。

トランプ大統領の当選、イギリスの EU 離脱など、世界の動向がナショナリズムに向かっているようなことが近年増加している。これらの現象はテロリズムとは無関係であるとは決して言い切れず、テロリズムが生んだ小さな波が大きな波紋となって広がっているような危機感を覚える。テロリズムが発する怒りにつられてこちらが熱くなってしまうのは避けるべき事態であり、改めて相対的視点をもってテロリズムについて考える必要があるのではないだろうか。

目次

はじめに p.1-2

第一章　「テロリズム」の語源と定義、その歴史

1－1.　語源 p.3-4

1－2.　定義の一般化 p.5-6

第二章　代表的なテロリスト集団と比較

2－1.　赤軍派、連合赤軍、日本赤軍 p.7-13

2－2.　赤い旅団 p.14-15

2－3.　オウム真理教 p.16-18

2－4.　アルカイダ p.19-21

2－5.　タリバン p.22-28

2－6.　ISIL p.29-35

2－7.　資料比較の所感 p.36-37

2－8.　宗教的テロリズムとイデオロギー的テロリズム p.38-42

第三章　相対的視点における分析

3－1.　人口爆発と経時的不況 p.43-44

3－2.　単純ではない宗教対立 p.45-47

3－3.　見えづらい被害と怒りの伝染 p.48-50

考察とまとめ p.51-53

参考文献 p.54